

談史原小田

3月15日
発行

創刊号

古寺新春

岸達 志

来客でもあつて、何処かへ案内しなければ……となると、まず無難なのは小田原城であろう。しかしそれもありきたりだとすると一寸と考えざるを得ない。

と なる湯本早雲寺などはまさに格好の散策の地の一つにあげられよう。こゝなら一泊する時間的余裕のない人でも、ほのかな浴けむりの香にふれることもできる。

昔を偲ぶに足る風情がある。松永記念館や古稀庵のある板橋かいわいも落着いてよいが、年中公開という訳ではなく、残念ながら門前をぶらついて引上げざるを得ぬ恨みがある。

その早雲寺が今度新しく改修されたと聞き、先日親しく拝観する機会をもつた。今迄は重そうな茅ぶき屋根が古びて、いさゝか荒廃の感を与え、それだけ又閑寂味をかもしだす境内で

あつた。新しく見る大屋根は銅板が猶きらりと光り美しい線を見せてそり立つている。私は寺の屋根は瓦にしくはなしと思つている者だが、年ふりた銅板が渋い色にそまつた早雲寺の風景もきつとよろしかろうと思う。建具もガラス戸などをはずす古び障子をそのまま、使つて、内部も出来るだけ旧態を保存しようと努力されたことは有難いことだ。寛政元年の棟札があつたさうだから、当地方では古い建物の一つに数えられる。一説に幻庵作と伝える本堂裏の禅庭も余分な木々をとりはらつてきれいな

つたが、この工事は築地や山門等と同じく、猶進行途中の如く見受けられた。裏の隠家は腐朽甚だしく、如何とも手の施しようなく解体再建するとの事であつた全く残念だと思ふが仕方がない。今年中に出来上るといふ、新築に期待したいと思う。

古建築の改修というのはソロバンに合わず、新築より金のかゝる事が多い。しかも余計金をかけて往年の風情をぶちこわしてしまふのが落ちである。実は三昧橋を渡つた私は、新装の早雲寺に半ば以上の不安と杞憂を抱いて境内に入ったの

小田原史談会も発足以来今年で六年目を迎えます。今までは大体外部の活動を多く取上げて来ました。例えば定期的な史蹟めぐりとか、展示会とか、講演会とか、支部結成への助成とかがそれです。これからも

は、潜越ですが本部中心の考え方で編集しましたので多分御不満が多いこと、思っています。今後はどしどし皆さんが、自分自身の発表機関だと思つて、原稿やお便

郷土の古くから先人が努力をかざねてきた。郷土開発のあらゆることがわかつてくるわけです。史談会の主たる仕事は、古いものを骨とす的にいじ

にあると思ひます。鬼に角、本紙を通して、大いに啓発し合おうではありませんか。新しい正しい郷土史を我々の手で作るつもりで……

かねてからお耳にしていたかと思ひますが、二月節分の日に相模国の延喜式内社並びに大社めぐりというが、市長選挙も行われることなので、延期し、また別の機会に、それらの神社を定例の史蹟めぐりにでも取上げようと、執行部会で話し合いました。どうぞ御了承下さい。

第一号を皆さまに送る

難波 明

こうしたことは従前以上に活躍したいと思ひますが、殊にこうした仕事を記録するために機関紙を持つて、この方面でも大いに仕事をやりたいと思ひました。

りをお寄せ下さい。それによつてこの機関紙の内容を高めて行きたいと願ひしているのです。

機関紙を通じてお互いの動向を知り、各人の仕事を戻り、そしてそれが直ちに

悪しきを捨てて、明日の郷土建設の資とすべきこと

の古寺が観光的地位を脱し、本来の禅風を展開してほしいものだと思ふ。

(廿六年一月)

★

★

★

発足を御祝いして

田辺 一雄

小田原史談会は古い歴史と実績をのこしておられるようですが、最近ほとみにそうですが、最近ほとみに状況を呈して来て、ここに会誌が発刊される機運になつたのは、まことに同慶にたえないところです。

小田原はさすがに由緒ある古都、ここを中心として史蹟が充満しているため、これらを研究探さくする史

家が、専門、非専門を通じて、ひじょうに多数おられることは心強く感じているところですが、こういう方が大同団結して、本誌を編集出版し、大いに研鑽の道を開こうというのですから、これほど結構なことはいないと思ひます。

よく、史談会はテングさんの集まりなどとじようだ

んをいう人がいますが、これは、史談会の会員方が、いつも熱意にみちて、史を論じあう一つのあらわ、いわせものだと思つております。この意味に於て、本誌がその道場として、熱意のはげ口としての使命をはたされんことを祈つてやまなものであります。

いずれにしても、誌運隆盛に、三号雑誌にならないよう号をかざねられんことを念願して、祝辞にかえさせていただきます。

小田原城宝永天守閣

—再建の疑問点—

中野 敬次郎

(一)四万五千両の小田原城復興工事

小田原城の天守閣は、北条氏直時代の天正十年(西暦一五八二)に初めて建設せられたものと推定されるが以来約三百八十年を経て今回新天守閣の再建されるまでの間に、崩壊、再建、修理、毀却などの幾度かの変動を重ねたが、大略にして言えば次の四変遷を経過したものと考えられる。

天正天守閣(天正十八年建

造せられ寛永十年大地震で崩壊するまでのもの)

寛永天守閣(寛永十年復興せられ元禄十六年大地震で崩壊するまでのもの)

宝永天守閣(宝永三年復興せられ、明治三年毀却するまでのもの)

昭和天守閣(昭和三十五年五月再築せられたもの)

ところで、このうち宝永天守閣の再建は、小田原城全体の復興も同時に行われたので、それと合せて江戸時

代三百年間の小田原藩の最大の土木建築事業で大久保家が一番の運命をかけて行った事業であり、また徳川幕府がこの事業を援助するために莫大な資金の支出を行つたが、その額がかさんで中央の財政が傾き、ために宝永三年以来数年に亘つて悪貨の改鑄を行つて幕府の財庫をうめたと称せられた程の影響をもたらしたのであつた。

元禄十六年十一月二十二日

の午前二時に起きた大地震は、被害は関東一円に及んだのであるが、江戸と小田原が最も激しい被害をうけたので江戸小田原大地震と称せられておつて、小田原としては空前絶後とも言うべきものであつた。この地震での小田原のうけた被害については、藩から幕府に呈出した調査報告が「甘露叢」という書物に書き残されていて、それによると、焼失家屋と潰家屋とが合せて家中四〇六軒、町中一一二三軒、総合計一五二九軒に上り、死者は家中では侍一九人、小役人四人、徒士召使男二人、家中の女子八六八人、合計一五三二人。町中で男二八九人、女三六二人、合計六五一人、他に旅人男三八人、女二人、寺社関係で僧侶二人、女二人。

小田原城下の死者総合計八四七人となる。このような有様であるから、小田原城の被害も想像ができることとて、天守閣は中央の柱柱が震動ではけしけし磨擦を起して火を發して炎上し、その他の楼閣、隅櫓、殿舎、石垣、堀まで一切崩壊して目を敵う姿となつてしまつた。そこで藩主大久保忠増が松原明神社に地震復興祈願文を奉納して小田原城復

興の決意を定めたが、幸に忠増の父忠朝は將軍綱吉の覚え目出度くあつて、老中職二十二年間、うち老中首席十七年勤めあげて隠居したばかり、忠増も幕府の寺社奉行、若年寄とすんで地震の翌々年の宝永二年に老中に抜擢された折柄であつたので、幕府に援助を懇願した結果、先ず一万五千両、後に三万両、合計四万五千両の資金を小田原城復興資金として借用することができたので、これを基として、復興計画をたて地震の翌年の宝永元年の初春より宝永三年の春四月まで二年数ヶ月を要して各方面の最大の力を動員して小田原城の復興を完成したのである。記録によると、その時の復興の様を

「三重ノ天守並ニ附櫓ヲ構エ、南ヲ百間堀トナシ、東ニ常盤木御門、九輪橋ト名付ケル跳橋ヲ渡シ、北鉄は門並ニ數十丈ノ堀ヲ掘リ打テ廻シ、並ニ兵糧藏數戸、塩藏、焙硝藏、裏御門並ニ御屋形、銅御門、千人満の平櫓、二階矢倉、中志切、馬出御門、厩曲輪、鉄砲矢倉、南門、蓮池弁財天夫ヨリ天神山外通り三ツ丸御門、何レモ渡矢倉ヲ構ヒ三ノ丸ヨリ卸本丸へ地形十間ニカキ上ゲタリ」と記し

ておつて、大規模の城普請であつたことを知る事ができる。このとき竣工した天守閣が宝永天守閣であつた。

(二)宝永小田原城復興記念碑と宝永天守閣棟札

この宝永天守閣の復興についてはいろいろ面白い話題があるが、私が多年抱いていた疑問点の一つある。それは、この天守閣は宝永二年に再建されたのか、宝永三年に復興されたのかという点であつた。今回再建された新天守閣の一階入口の左側に、宝永小田原復興記念碑というのが置かれてある。この記念碑は大正十二年九月一日の大地震のとき、小田原城天守台の石垣が崩壊して、その石垣の積石の一つであつたものが発見されたのであるが、碑の高さ三尺八寸五分、幅一尺六寸ある長方形の石碑で、天守台の隅石の一つであつた。その表面に

「元禄十六癸未年十一月二十二日夜地震、天守城楼回祿、翌年春始再興之事、宝永三乙酉年四月日、天守城楼以下、迄外郭惣石壁築成矣。於是撤攻干壘石以誌焉。従四位相州小田原城主兼隱岐守藤原朝臣大久保氏長忠増再營」

と刻してある。申すまでも

なく、宝永天守閣が落成したので、藩主忠増が記念のために後世に残さんとして刻銘したものであるが、この文面には明かに天守閣の完成を宝永二乙酉年四月と記してあるのであるが、この記念碑は発見以後小田原城研究の貴重な資料としてこの碑面の文面によつて、宝永二年に天守閣が完成したものとされておつて、殆ど人の人が疑われないようである。しかし私はこの彫銘に多年疑問を持つていた。

の貴重な資料がある。それは宝永天守閣の棟札で、今回所有者の大久保神社より借用して新天守閣三階のケースの中に陳列しておいた。この棟札は昭和十年十月十四日に大久保神社の倉庫の中から発見されたものであるが、長さ五尺四寸五分、幅一尺三寸五分、厚さ八分の立派な檜材で出来ており、宝永天守閣が再建中にその上模様に、前述の記念碑を作つたのと同じ人である藩主大久保忠増が奉納した上棟札である。

この棟札には、表裏二面に天守閣建造に關係した惣奉行、副奉行、設計者、小奉行、下奉行を始めとして、大工、瓦師、葺師、左官、石工、肝煎、木挽に至るま

で、一切の關係方面の代表者の姓名が刻名に列記されてあつて、宝永天守閣並に城郭復旧の事情を調査する珍重すべき資料であるが、その表面の正文に

「上棟。從四位下侍從相模國小田原当城主藤原朝臣兼加賀守大久保氏長忠増再興。

相模國尼柄下郡小田原城天守奉進請摩利支天俯惟國土安全君民和合永奉執政職武運長久領地靜 家内裕昌子孫繁榮処人愛敬家士郷民無為平享万世福寿祈所。

宝永乙酉二年十二月吉祥日（下略）」と記してある。同一人である藩主大久保忠増が作つて記念碑とし、棟札とした二つのものに、天守閣の完成を記念碑に宝永二乙酉年四月と記し、未だ完成前の上棟式の棟札に宝永乙酉二年十二月と記したことに疑問なくして済し得ることであろうか。

（宝永二年か宝永三年か）さて、前述のように、復興記念碑の文面によつて宝永天守閣の落成は宝永二年四月ということになつてゐるが、私はこれには長い疑問を持ち続けてきた。次にような理由がある。

「大久保家譜」によると、「天守、城桜、其他櫓門、

外郭等、宝永三年戊辰二月復ス」とあり、また「古余綾見聞志」という書物があるが、これは作者不明であるけれども天保年間の頃、学力の相当にある小田原藩士によつて書かれたものらしく、大久保家の由来と藩士達の故事逸話などを面白く書いてゐるが、史実に合せて殆んど間違ひのない貴重な資料の一つであつて、その中にも

「去程に宝永三年四月吉日三重の天守高々と雲を凌ぎ城桜悉く成就す」と記してある。このように古い記録の伝えるところは、みな宝永三年の天守閣落成になつてゐる。また、この天守閣の造営に作事方の中心となつた大工頭梁の川部首右衛門の家柄の祖先書に、天守閣造営工事は宝永二年四月二十七日に初まり翌三年六月十八日に竣工したと記してゐる。

更にまた、この天守閣が出来たとき、その大棟の上に掲げられた鯛は、旧天守のものゝ互製であつたが元禄地蔵に天守閣が落ちてしまったとき鯛も落ちてみじんに砕けてしまつたので、新に青銅で造られたが、それにも藩主忠増の名を以て記念の銘文を刻して掲げたのであつた。この鯛の実物

は今失われて無くなつてゐるのであるが、前掲の古余綾見聞志の中に鯛の銘文が記録されて残つてゐる。それには

「元禄十六年癸未十一月十二日夜地震而天守城樓回禄矣。尋合命翌年春再興之事始。宝永三丙戌年天守城樓。其外所々櫓門外郭以下。率旧制終營功成。以仰万世之供基。乃彫刻于魚虎者也。」

從四位侍從相州小田原藩主兼加賀守藤原朝臣大久保氏長忠増再啓」とある。銘文が小田原復興記念碑のものと同く似てゐるが、多少の相違があることと、この鯛銘によると天守閣の竣工を宝永三丙戌年としてゐる。

このように、記録に残された資料は悉くが宝永天守の竣工を宝永三年としてゐるが、復興記念碑のみが宝永二年と刻してあるので、宝永二年か、宝永三年か何れが正しいのだという問題が生ずるのであるが、従来は復興記念碑が世に出て実物として人目にもふれてゐるので、一般には宝永二年四月を天守閣完成の時として疑いも生ぜず信じられて来たのである。

しかし、今ここに前述のよう

に記録がみな宝永三年を主張してゐるとなると復興記念碑の銘文を無条件で信ずる訳にはいかないのである。復興記念碑は現に実物が誰しも見ることが出来るもので、宝永二年乙酉年四月と刻してあることは何人の目にも間違ひないところであるから、古い記録の方が宝永二年と書くべきを三年と書き誤つたか、伝写の間違ひであらうと言へるかも知れないが、それにしては、どの資料にも宝永三年とあるのを、皆誤り書いたものと言へるであらうか。特に鯛の銘文を記念碑の銘文と比較して見ると、記念碑は宝永二乙酉年とあり、鯛銘には宝永三丙戌年とあるから、宝永二年を三年に写し誤つたものでなく、最初から宝永三年と刻む目的であつたことが解る。また宝永二年とある記念碑は藩主忠増を隠岐守とし、宝永三年とある鯛の方は加賀守とある。事実において忠増は宝永二年の夏まで隠岐守を名乗つており、同年夏に岩乘寄に昇進して加賀守を名乗つたのだから、記念碑の宝永二年四月に隠岐守とあるのも正しく、鯛銘に宝永三年四月加賀守とあるのも正しいのである。鯛の実物は残つてはいないが、恐らく記録

に残る銘文は鯛銘の真実を写したものと考えてよいであらう。

（小田原城復興記念碑の銘文誤記）

このように考えてくると、宝永二年か宝永三年か、どちらを正しいとするかの問題を決定することがむづかしくなるが、誠に幸なことに、これを簡単に解決することの出来る資料が現われた。それが前掲の宝永天守閣の棟札であつた。

この棟札はすでに述べたように、発見は新しいことであるが、昭和十年のことである。この後間もなく小田原藩史の研究者瀬戸秀兄翁が、その全文を写記したものを持つて私の宅を訪ねてくれた。際に頂戴したのであるが、以来この記録を久しく篋底に蔵して失念し、棟札の実物も近年まで見もしなくて過した。昭和三十三年四月小田原市が天守閣再建の計画を起し、私がそれに関係するようになって、古い記憶を思い出してその実物を検討することになつた。それと前記の如く、棟札の表面の文面に「宝永乙酉二年十一月吉祥日」とあつて、宝永天守閣の上模様にこの棟札を奉納したのが宝永二年十一月であることが解る。この時は天

守閣の竣工を宝永二年四月と記してあるのであるが、この記念碑は発見以後小田原城研究の貴重な資料としてこの碑面の文面によつて、宝永二年に天守閣が完成したものとされておつて、殆ど人の人が疑われないようである。しかし私はこの彫銘に多年疑問を持つていた。

の貴重な資料がある。それは宝永天守閣の棟札で、今回所有者の大久保神社より借用して新天守閣三階のケースの中に陳列しておいた。この棟札は昭和十年十月十四日に大久保神社の倉庫の中から発見されたものであるが、長さ五尺四寸五分、幅一尺三寸五分、厚さ八分の立派な檜材で出来ており、宝永天守閣が再建中にその上模様に、前述の記念碑を作つたのと同じ人である藩主大久保忠増が奉納した上棟札である。

この棟札には、表裏二面に天守閣建造に關係した惣奉行、副奉行、設計者、小奉行、下奉行を始めとして、大工、瓦師、葺師、左官、石工、肝煎、木挽に至るま

で、一切の關係方面の代表者の姓名が刻名に列記されてあつて、宝永天守閣並に城郭復旧の事情を調査する珍重すべき資料であるが、その表面の正文に

守閣はまだ竣工していないので、復興記念碑に宝永二年四月に天守閣や城楼までが悉く出来上つたと書いてあるのは明に誤りであつて竣工は当然宝永三年四月とするのが正しいことになるのである。

そこで、然らば復興記念碑に何故宝永二乙酉年四月と刻したかということが疑問になるが、これは恐らく次のような事情であろうと推察せられ、まず間違ひのないことであろうと信ずる。

この記念碑は天守閣合の石垣の一つである隅石の一面に刻されてあつて、大正十二年の大地震の時に石垣の崩壊によつて発見されたものであるところからすると宝永天守閣復興の際に、この復興を長く後世に伝えるために城主忠増が銘文を刻記して文面を内側に見えなくし石垣の隅石の一つとして積んでおいたものであつた。その時の天守閣完成の予定は宝永二年四月であつたのでこの完成予定の年月「宝永二乙酉年四月」と刻しておいたのであるが実際の天守閣の完成の日がおくられて翌年となつてしまつた。しかし記念碑は天守閣の下の石垣の積石の一つになつてゐるので、取り出して書き改めることが

出来ないで、そのままになつてしまつたのであろう。天守閣の完成が宝永二年か宝永三年か、何れが正しく何れが誤りとしても僅かに

刀劍夜話

—伊賀仇討の刀—

橋本整之介

寛永十一年十一月七日、伊賀の上野で荒木又右衛門が仇討をした時に使つた刀は来金道であり、また相手の桜井半兵衛を斬らうとして刀を折つてしまつたことは人のよく知るところである。これに関して、因州藩士某が、伴信友に送つた詳しい記録があるので次に少し紹介してみる。

「所々佩刀鋒より一尺五寸五分斗本ノ方ニテ折ル、長二尺七寸五分斗、鋼本ヨリ一尺一寸七分上り折二ツニ伐り居候ヲ合せ見候、而上ニ記候寸尺ニ相成。刀ノ銘「法橋藤原金道」右刀ノ折レ先年城下大火ノ節宮宮ノ内ニテ焼候而焼刃等今ハ不見候、天保九年十一月七日渡辺数馬之末孫美田八郎方ニ罷越報仇之節之佩刀所望致一覽候。是者其節之拵エ儘ニ而居申候。毎敵報仇之日荒木岡本両家ヲ招キ彼

一年間の歴史の差の問題であつた。しかし、これにながら資料をたどつて行く興味はなかなか尽きないものがあつた。

刀を床ニ出し置候家例之よし、縁赤銅無地、頭者角と見へ黒ぬり、所謂リウゴナリ之柄ニ黒ぬり、絞革巻、(つば)は無地鉄鍔、切羽鋼、鞘は黒た、きの様ニ見へ(ヨク見候へ者蒲原鮫ノせ塗候様子也)子尻ハ剣ゲ候而木見へ申候。鏢モ弛ミ音イタス)目釘ハ皮巻之下ニ成居候而刀之中心ハ見候事無之よし鋼元一尺斗より鋒迄之間刃先或ハ缺ケ或ハユカミサ、ラの如ニ相成居申候、キビシク打合候事と被存候。身のユカミ無之鞘に能ヲサマリ申候、此節ニ而者足輕体之輕キ者ニ而も指申間敷と存候粗末之拵ニ御座候」又、右の刀に差添へてゐたものは宇多國光の作でこれに就ては左の様に記してゐる。「長二尺一寸一分焼刃ハ直ニも無之ニも無之先直の乱たら呼

ると申候なる刃文銘宇多國光(宇多國ハヨメ候へ共下ノ字磨滅ヨメカネ申候) 〓

子供るす

木村博

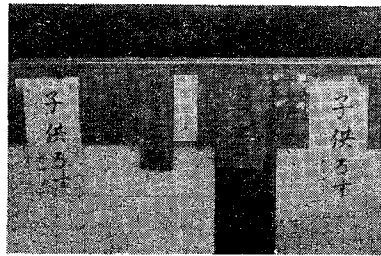
旅は楽しいものである。つらいこともあるが、過ぎてしまえば、みんな楽しかつたような気がする。気儘な旅なら、尚更楽しからう。

かねてから、一度はお詣りしたいと思つてゐた、大和の長谷観音の参詣を済ませた我々は——東海老人と立木氏と——長谷の駅までブラ／＼と歩いて帰ることにしたが、そこで簡単に腹ごしらえしてゆこうということになり、お上りさん然と、物珍しそに街並を眺めながら、又勝手なこと声を高にしやべり乍ら歩いてゐた。往きがけにタクシ一の運ちゃんから、つい最近までは、こが賑やかな色街(?)であつたといふ話を聞いて、へエツつと意外な気がしたのであつたが街を歩いてみると、その名残はよく分つた、料理屋とも食堂ともつかぬ店の中か

伊賀上野敵討始末より (つづく)

乱刃びかける女達も、たゞの女中とは思えなかつた。運ちやんから聞いた予備知識のおかげで、そういつた危険な店には、入らずに済んだのであつたが、逆に又その知識の為に、正直な所

入りたい欲望も無くはなかつたのである。何れも鼻の下の長い連中だし、茶目ツツ気十分な東海老人なんぞは最も無難なるソバ屋で、我慢させられたことには、御



不満だつたかもしれないのである。長谷の町はかつては(今でもそうには違いないが)伊勢街道の宿場としても、栄えた所であつたような。単なる長谷寺の門前町ではなかつたのである。それを聞いて漸く納得がゆくような気がした、町を歩いて、家々の軒下に、赤い御幣が立つていたのを不審に思つた。人の話に、それがこれから訪ねようとする三輪神社からうけてくる御幣だということを知つた。私は七、八年前に、高野山に詣つた時、和歌山から高野に乗り換える橋本という町を、小一時間程歩いたことがあつた。その時これと同じ様な赤い御幣を見たことを、やつと思ひ出した。その中今度立木氏に教えられて、あと奇妙な軒下の貼紙に目を止めた。四分の一程の半紙に墨で「子供るす」と書いて而も逆さまに貼りつけてあるのだ。二枚貼つてあつたが、凡らくこの家には二世帯住んでゐるのであろう。小さく書かれた姓が別だつたからである。丁度居合わせた、その家の若いおかみさんに聞いてみた。そしたらハシカ除けのお呪いだというのであつた。早速こ

れもカメラに撮らして貰つて、又歩き出した。

さてこの「子供供す」についてだが、ハシカが家の中に入らない為に、そして子供がハシカにかゝらない為に「いま子供はいませんよ」と嘘をつくのだから面白くない。然も御丁寧に、それを退さまに貼つたりして、二重にはぐらかそうとしているのだ。考

えようによつては、これは折角「るす」を公示しても、何もならないというものである。それに第一、仮に家の中にハシカを入れま

いとしても、家の外に病魔がウロチョロしているんでは、外に出たあなたに、とつかれてしまつたらどう。今日の環境衛生学的乃至は予防医学的見地よりすれば甚だ幼稚といふか、むしろ自分の家さえよければいい、甚だ利己的な処置であつたと云える。

こんなことでも気休めになるとすれば、人間なんてものは、いくら新しがりやの人でも、案外な古さを棄て切れないのかもしれない。(一九五九・九・一夜)

曾我兄弟仇討の発心

穂坂辰巳

工藤祐経の命を含んだ大見小藤太成家、八幡三郎行氏の射放した遠矢に当つて河津三郎祐泰は安元三年三十三才の花の盛りを一期として、伊豆の奥野の露と消えた。先夫には生別し、二度の夫には死別した妻の満江は悲しみの余り剃髪してひたすら夫の菩提を弔わんと決心したのであつた。然し父の祐親も縁者の人々も嘆き悲しむ満江の姿を見ては子供の事共も想い出され却つて悲しみを増すのみであつたと辞む満江を無理に押し

進めて曾我太郎祐信・再嫁せしめたのであつた。兄の一萬が五才、弟箱王が三才の時であつた。一万箱王の兄弟が曾我に來てから三年、何時の間にか頑是なな幼な心にも親の仇討たいんとする勝気なさが浮んできた。そして次第に深く心に喰い入るのであつた。念ずる心は不動明王に仇を討たせ給へと祈願を込めたのである。今の下曾我の曾我山頂に不動山と称する地名の地に不動尊の石碑があつて今不動と云う。此不動尊

は大山阿夫利神社から兄弟祈願の為懇願して別社として祭られたと云い伝う。此祈願文が下曾我の城前寺に宝物として保存している。

願いの文

不動様に申し上げ候、我等兄弟は父にはなれ母ばかり頼み面白き事なく兄弟づれにて他に参り候えば、む

かい屋敷の平殿にせびらかされ、いわや下々まで同じ様にせびらかし候故家に帰り母様につげ候えば色々叱かれ、せつかんにあいに申候ま、かなしくも外に出で申さず、箱王と二人家人居申し只父の事ばかり思ひ只まことのと、様のない故によその者にも笑はれ申候

早う大きな男になり仇工藤祐経をうち申たく母様の大事にせいとのおん教へ守り大尊にて候は、早う願ひ祐経をころし申度く候 草々金言 一万箱王 何んか云う可憐なしかも大望を込めた願文であろう。孝心な心情打たれるのである。

こ、は鷹匠の屋敷と鷹舎があつたので地名となつたのです。鷹部屋の北側一帯は永久寺(今は入谷津に移る)の境内で富士キツチンの裏の高合には北条氏政、氏照の墓が残つておられます。東宝館のある通り。これを下幸田と云つて小林病院の前から郵便局までで先程お話しした相馬屋敷は下幸田にあるのです。揚土通

小田原旧町散歩

— 完結篇 —

滝口 伊将

今日は幸田門から歩き初め

れてありました。

ましよう。この道を北の方に駿豆鉄道ストアアの所迄を上幸田(うわこうだ)と云います。幸田門の外は左右共三の丸の外堀になつて

駅前の方に参りましよう。横浜西部運送と小田原自動車工業との間に小田原駅の方に向つて行く細い道があります。この道を行きましよう。ここを繁幸田と云つて百メートル程行くと右に曲ります。ここです。ここ

井伊家に御預けの身となり小田原城は幕府直轄の城となつたので忠隣公の奥方は城を出て日向屋敷で余生を送られたのです。この奥方の父君は石川日向守でありましたから何時からか奥方の事を日向様と呼ぶようになり後々迄地名となつて残つたものです。

それでは駅前参りましよう。旭の前の、この人道が昔の揚土通りです。向側(北)にタクシーの事務所が見えますね。事務所は東はずれの所に道が見えます。あれが此の前お話しした新倉道で、あさひのお店

の所に遠く続いています。あれは三の丸の石垣の上にあつた松の木で小田原城のあつた当時からのもので、今ではその地積一帯を文部省から史蹟として指定されて

曲る曲ると「あさひ」の横で駅前に出ます。駅の出来る以前はこの曲り角の所から駅の構内の方に向つて細い道が八十メートル程有つて

揚土通りと続いております。こを日向屋敷と云います。こを日向屋敷と云います。こを日向屋敷と云います。こを日向屋敷と云います。

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

署は相馬屋敷で、相馬氏は相馬将門の後裔と称され屋敷の入口に相馬神社が祭ら

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

大久保忠隣は京都の所司代として慶長十九年京都に赴くや間もなくえん罪で、

いる所は元須藤町と云いました。小田原北条の時代に須藤惣左衛門と云う鉄砲師が住んで居たのでこれが地名となつたものです。この須藤町の東裏に大工町通りから中新馬場通りに出る南

発行に寄せて

浅見 靈 風

既に出ずべくして出なかつた、小田原市史談会の機関誌が「小田原史談」と銘打つて月刊発行されることは海に喜びに耐えない。全會員の心から歓迎されるであらうし、今後の発展を祈るとともにお祝いの言葉を述べ、併せて編集室へ希望の一端を書いて見たいと思ひます。

創刊早々のことではありいろ／＼の困難と隘路はあるだろうが、市域の人文地理史研究を主眼とする史談会の機関誌である以上、その編集骨子ほどこそ小田原地誌でなければならぬ。従つて今日まで史談会に於て蒐集し得たあらゆる部門の研究資料を系統だてて整理し、余す処なく本誌に号を追つて統括するを主任とし、それに各地区會員の筆

北の道があります。これを手代町通りと云います。これで旧町散歩も終りましたので散会いたします。銀座で御土産でも買つて御帰り下さい。ではさようなら。

曾我の里

神 保 栄

曾我一帯の地は古くより曾我の里として知られているが弥生式土器及石器の発見や古墳群の有る事で往古から住みよい土地で有つたと思ふ。然し、文献に有る様に永祿二年四月曾我城主祐氏、信正の父子が北条氏康と事を構え、七月討死の際戦禍を負ふたが、古建造物等遺物の少なき割合に、地名に昔を偲ぶ所が多く有る。其主なるものは左の如くである。

小田原市民

俳句集刊行

小田原俳句協会(会長杉山夢洋氏)では、かねてから念願だつた小田原市民俳句集をこのほど発行した。本文二八四頁、付録に現代小田原俳壇系譜をつけて堂々たる豪華版である。装幀は横田七郎氏、題字は長谷川如是閑翁、序文を小田原市長鈴木十郎氏、教育長藤原嘉市氏、まえがき杉山会長。俳句の鑑賞は、詩人井上康文氏、作家尾崎一雄氏、石井浦人氏らで、本文の百十一人集のなかには、作家川崎長太郎氏が俳句十句を発表しているが、これは同氏が公に俳句を発表した初めてのことで各方面に話題を生んでゐる。編集委員会委員長佐倉東郊氏、発売元八小堂、定価四百円。

講習会

拓本のとりかた

第一回

日時 一月二十九日九時

場所 郷土文化館

講師 東海俊美理事

拓本のとりかたが覚えられますと、金石文の研究には

伊豆の伝説

栗の長者

後 藤 江 村

聖武天皇の御宇、遠江の人、磯崎八郎吉富といふものが、伊浜の地を領してゐた。吉富は、熱心な観音の信者であつた。ある夜霊夢を見た。吉富は、「これぞわが家の守本尊である」と、邸内に安置して日夕礼拝した。それから長月日が経つた。八郎吉富は七十の長寿を保つて長逝し、子の五郎吉勝が家を嗣いだ。山池一角も世を去つた。そして子の一角が、新しい主人吉勝に仕えてゐたが、これは早世して、孫の一角が、吉勝に仕へるやうになつた。孫の一角は父にも、祖父に

非常に役立ちますし、だんだん上手になると、拓本を利用して、室内の装飾とか表装して掛物などにも応用出来ます。

第一回は右の日時に行いますが、第二回目から受講したい方は、郷土文化館まで申込んで置いて下さい。日時場所など御通知します会費は、実費自弁です。

も劣らぬ忠義の家来であつた。三代目の一角は、その時、十九の若者であつた。ある夜、観音は一角の夢枕に立つた。

「汝の祖父が霊木を拾ひあげた海中へわれを乗てよ」観音は云つた。しかし一角は、これを疑つた。主君が厚く信奉する尊像である。海へ乗ることができるものではなかつた。

「海に乘てよ。汝の祖父が拾ひあげた海へ」と、繰りかへした。一角は、尚、信じなかつた。わが心の迷ひであると思つた。夢とはいへ、この怖ろしい反逆を聞くのが一角には耐へ難かつた。三日目の夜も、同じことを夢みた。観音の声には威厳があつた。

「乗てよ。汝の手によつて海へ」その声は、一角の耳底へ、つよくひびいた。一角は、はじめて観音のお告げを信じた。そして、主人の居室へ忍び入つた。観音の像を盗み出した一角は狂氣したもののやうに海中へ走つた。そして観音像を海中に投じた。彼は、その刹那、主人に対してこの反逆をしたことを悔んだ。そして、再び主家へかへらなかつた。凜然として、独り相

模の国へ渡つて行つた。月日は早い。桓武帝の延暦十二年となつた。その正月三日の朝である。伊浜の漁人が網をおろして鯛を捕つてゐると、一体の仏像が網に入つてきた。漁人は驚いた。そして、不吉の兆であると思つた。漁人の中に一人の翁があつた。「沖へ速く乗てろ。それでも網へかゝれば、この浜に縁の深い仏さまだ」おきなはさう云つた。若い漁人が船に仏像をのせて、遙か沖へ乗てに出かけた。

「はて、不思議なことだ。二十年前に、乗て去つた観音さまではあるまいか」と思つた。一角は故郷も恋しかつた。海からあがつた仏像をも見たかつた。主人の家も氣にかかつた。

一角はある夜ひそかに伊浜の地を訪れた。二十年の月日が過去のものとなつた間に、伊浜の地にも消長があつた。主君磯崎の家は亡んで庭には草が茂つてゐた。一角は茫然として立つた。すべては長い夢であつた。

その翌日、仏像は再び網にかかつてきた。おきなはつくづく仏像の尊容を眺めて云つた。「さて、御縁のある仏さまだ。もう乗てゐることはできない。とにかく俺の家へお連れ申さう」観音は、おきなの家に安置された。遠近の男女が雲集してこの観音を拝した。おきなは、そこで一堂を建て、仏像を安置した。

「海から仏像があがつしやつた。伊豆の、三浜の港へ」いふと評判は忽ち、遠近にひびいた。相模の国に寂しく暮らしてゐた一角は、この話を聞いて

「はて、不思議なことだ。二十年前に、乗て去つた観音さまではあるまいか」と思つた。一角は故郷も恋しかつた。海からあがつた仏像をも見たかつた。主人の家も氣にかかつた。

一角は里人に教へられて、観音堂に馳せた。おうそれこそは、かつて彼の手によつて海へ投ぜられた、あの観音像であつた。一角は感極まつて泣いた。泣いて観音を伏し拝んだ。流れ去つた過去が再び一居の胸に蘇つてきた。

主家のこと、父のこと、祖父のこと、蠟夢のこと、逃亡のこと……そして、今、自分一人が残つてこゝにあらうとは、一角は後半生を観音堂の堂守として仏に仕へる決心を固めた。そしてそのまま堂に籠つた。三七日の間普門品を誦して堂を出なかつた。ある夜、観音はまた一角の夢に現れた。「汝はこれより蛇野(あざ

の)へ行け。野馬が汝を待つてゐるであらう。野馬にしたがつて粟を時け。汝は長者になること疑ひなし」夢は破れた。が一角の手に七穂の粟が残つてゐた。一角は、もはや、観音のお告げを疑ふ人間ではなかつた。七穂の粟を握つて、蛇野ヶ原へ出て行つた。一定の野馬が彼を待つてゐた。彼は、野馬の背にのつて粟を時いた。自然の沃野蛇野の平原に粟は散つていつたやがて秋がきた。見わたす限り果てもない蛇野ヶ原は粟の穂で黄金色に輝いた。彼は忽ち粟の長者となつてしまつた。

一角は、俄かに長者となつた。金殿玉楼が造られた。あまたの下男下婢が召し抱こられた。それでも、金銀は倉にみちた。粟の長者はかくして富み栄えたが、その子孫は淫酒にふけり安逸を貪つたので、遂に亡びた。その邸址を今長者ヶ原と呼んでゐる。(伊豆三浜府)

又、一説に云ふ。粟の長者は、粟餅を携いて邸宅の壁に塗つた。黄金色の粟粒の斑点は金砂子の模様に似て美しかつた。その頃、世は怖ろしい飢饉であつた。貧しい人々は、

野山に分け入つて、木の根草の根の根をもとめて、わずかに飯を凌いでゐた長者は空しく手を束ねて貧民の若しむ様を心地よげに眺めてゐた。二年三年このまま飢饉がつづいても、長者の倉に積んだ粟の山は崩れさうにもない。

ある朝、長者は邸の壁に大穴があいてゐるのを見つけた。そして、それが飢えたる人々の仕業であることを知つて怒つた。次の朝も、その次の朝も、壁の穴はだん／＼大きくなつて行つた。長者は一策を案じて、既舎から馬糞を運んだ。壁一面の粟餅に馬糞を塗りつけた。これで飢えた人々の手を払い除けたつもりであるが、それでも壁に穴があいた。飢えた人々の前には、馬糞も牛糞も汚いものではなかつたのである。

長者の家運は、この頃か、忽ち衰微に向つた。大木は倒れるのが早い。長者の家の没落は、それであつた。落日を招き返す威勢がどこに見出されよう。——ありし日の榮華が大きければ大きい程、今は却つて大きい悲哀であつた。長者は悄然と京を指して落ちて行かねばならなかつた。広漠と見た長者ヶ原に沈む夕陽を見

かへりつつ寂しい漂浪の旅についた。長者の既舎には七十五頭の馬が繋がれてゐた。主人が京へ指して漂浪の旅へ出たことを知つた馬は、綱を噛み切つて、後を追つた。しかしなつかしい古主の姿はほどこにも見出されなかつた。七十五頭の馬は哀れ花石がそれであるといふ。長者の末路こそ一篇の哀詩といふべきであらう。(特別に老犬家の寄稿をいただきました。立木)

考古学教室

縄文土器のはなし

立木望隆

随分古い昔、土器はいつたじぬふうにして作られたのではなからうか。ヨーロッパでは、中石器時代に始めて作られたと云新石器時代に発達したと云はれてます。日本では、大体縄文式時代の初めからあります。カゴや編物や木ノ実の形をまねて作ったり、カゴに土をぬつて焼いたとかいわれていますが、一部の学者は、伊のまわりにある土が異常に固くなることに気がついて土器を作ったようになったのだらう、などというくりに云はれています。

土器そのものの作り方に就いて申しますと、粘土を手でもつてツボとか碗の形を作る手づくね法、粘土を帯状にして輪に作り、一段ずつ下から積みあげていく輪積み法、逆に粘土を紐のようにして口縁の方から一段と巻上げて行く巻上げ方などいろいろあります。縄文式の土器は大体がこの巻上げ法で作っているようです。

土器に紋様をつけるのは、一応形の出来た土器にさらに化粧土がぬられ、まじりながら乾きの時に、そこに紋様をつけるのです。小田原史談会の理事である内田武雄さんは、自分で、わざと古いカマを庭先に作り、足柄平野のあちこちの粘土を集めてきて、縄文や弥生式や十師のようなものをつぎと焼いて研究してみています。紋様をつけるのは大変おもしろいといっています。

話がわき道にそれましたが、日本の縄文土器の紋様なども、考古学が初まつた頃は、何か編物を押しつけたのだらうと考えていたものでした。それが東京大学の山内清男先生の研究によつて、土器の表面に縄を廻転してつけられたものであるということがわかりました。縄文の撚り方にもよくみると左よりと右よりとがあります。この左よりと右よりを連続させますと、連続花積式(久野三京窪出土)についているような特

長のある羽状縄文が出来ます。こんなことは簡単ですから、自分で一寸試してみると面白いのです。ところが、また話が脇道にそれますが、昨年春、酒匂小の六年生が久野の郷土室を参観に来て、学校から私に何か話してくれと頼まれましたので、古代のお話をしました。話が終つて、何か質問がありますかと聞いたら、早速一人の生徒が立つて「先生はさつきたお米は弥生時代に入つてきたといわれ、それなのに縄文土器の紋様は縄をなつて作つたといわれましたが、それではお米も縄文のころからあつたのではなかつたのですか?」この質問にはびつくりしてしまいました。成程そうです、いったいどう私が返辞したと思われませんか、皆さんならなんと答へになりますか? これ

丹念に調べることが大切ですから、おそろく百何十種類はあるのですから、その上この他廻転捺捺文(おうなつもん)と云つて、丸い棒に、山形とか楕円形とか格子目など刻み目をつけて、土器の壁をくるくると廻しつけて、つける方法が行われま

さて、縄文は、各々の時代によつてその特長を現わしていますので、それを、

丹念に調べることが大切ですから、おそろく百何十種類はあるのですから、その上この他廻転捺捺文(おうなつもん)と云つて、丸い棒に、山形とか楕円形とか格子目など刻み目をつけて、土器の壁をくるくると廻しつけて、つける方法が行われま

漢詩の旅

井上英一

文学者でも漢学者でもない者が、漢詩について書く云ふのはどうかと思ふが、詩の旅に出掛けた積りで思作やら先輩の名句を日記より選出して少しく述べて見ることにする。悪い箇所は見逃し願いたい。

扱て今日は終戦第十六回日の記念日です。先ず一番に次の文章が目に入る。 拜大詔渙発 禎軒 奸雄猛戰治ニ温籠一宇宙黄 宏都感生苦節千年清劍磨 賜光上空 萬恢昭 昭和二十年八月十五日

機を待ちなん、すればいつの日か温光は我が日出るの国より昇りて真の平和の世界を照す時あらん事を願ひ且つ確心するものなり。

これがマツカサー司令部から激しく追究された問題のもの、皇帝は「われわれ漢人は誰へもこんな風に誇張して書いて差し上げるのが礼儀と心得である。だから日本国とは心から親しみをもつてゐるのではなく、只表面の交りだ」の意味の答をしている。

余談になるが、皇帝の弟君の〇傑と云ふ方が当時日本の陸軍士官学校に在学中であつた。そして夏中休暇を利用して満洲国に帰るに

吹きこんで持つて行かうと云う事になった。そこで片方は満洲語、片方は日本語練習する必要がある。借行社に集つた者は、薄傑氏と、皇帝侍従武官陸軍中佐吉岡安直氏、それに詩吟範士の木村岳風氏と小生の四人、それが昭和十二年一月十八日の事である。

旭がいざ始めて見ると満洲語の発音は仲々六ヶ敷い薄傑氏を先生として習つたのであるけれども皆んなも上手に出来ない、それに吟じた場合ピンと来ないと云ふ次第でこれは遺憾ながら中止のやむなきに至つた。(つづく)

第三回 東海道宿場研究会

- 一、日時 昭和三十六年三月二十五日午後四時一〇分沼津駅集合
- 沼津駅四時三〇分発(浜松行列車)七時一分浜松着 乗換
- 同駅七時三〇分発(新居駅七時五八分着、旅館一泊)(夕食各自持参)
- 一、旅程 三月廿六日(日) 曜)午前七時新居関所前出発(バス)白須賀(今川義元、北条早雲遺跡(見坂))。三州田原(渡辺華山屋敷、墓所、田原城址)。吉田(豊橋)吉田城。御油、赤坂、藤川各宿場見学。岡崎(旧宿場と岡崎城址公園)池鯉鮒(知立猿投神社)。鳴海(鳴海)はり、義元戦死地桶狭間、芭蕉の千鳥塚宮(熱田神宮、旧宮の渡し)。名古屋城見学。午
- 後四時新居駅前着。同四時二八分発列車(東京行乗車)午後八時一二分沼津駅着 解散
- 一、会費 金二、三〇〇
- 宿泊料、汽車、バス、見学、昼食膳料等一切)
- 一、講師 戸羽山瀧、柴田澄雄、那賀山乙巳文、榊原清彦各先生
- 一、募集人員 三十五名(子供は謝絶します)
- 一、締切 二月二十八日(申込の際金壹千円払込の事。不参の節は払戻しです)
- 一、注意 三島地方が雨の場合でも目的地に支障なければ決行致します
- 一、申込所 三島大社内駿豆史談会(電話三島〇〇一七二番)
- 静岡方面は東立葵文庫内(静岡史談会 飯塚伝太

当て言葉

第一問

「ま、なんてつたつて、太郎んちのかかあくれえ、じくどうなかあは、おらほかに知んねえなあや」

「てッ／＼おめえんこのおやじのぼつことおんなじで、この村のめえぶつよ」

右の会話のなかに、小田原地方でなければ通じないことばが二つかくれています。なんとんでしようか。おはがきで編集室までお寄せ下さい。当つた方の氏名を發表します。

◎ こういう催は中々ないのだから是非御参加下さる様お勧め申します。

主催 駿豆史談会

講演会案内

日時 三月十二日(日)二時半

場所 谷津 はじめ塾会館

◆題 「縁切寺から見た人間像」

講師 井上禪定先生

(鎌倉東慶寺住職)

東慶寺は松岡御所ともよばれ、江戸時代無類の女性相談所であり、婦人裁判所でもあつた。井上師は寺伝の史料を基にし、名著「縁切寺」を世に送つた篤学の士である。会場は谷津だいなり神社下八百屋の横丁を百米程入つた所、大方の御来聴をおすすめしたい。主催在家仏教会。

郷土史など発刊

久野史談会(会長山田一郎氏)では昨年同所公民館(館長山崎益太郎氏)の依頼で久野郷土の歩みを発行すべくそれ／＼の部門で稿をまとめていたが、三月末

原稿募集

考古、歴史、民俗、伝説、なんでも結構です。何枚でも構いません。たゞ成る可く郷土に關係したことが好ましいことと、原稿は、全て原稿用紙を使つて下さい。

御近所の道祖神とか供養碑とか、寒念仏とか。庚申塔とか、金石文の形や大きさ、年号など、貴重な資料になりますから報告して下さい。所在地は必ず書込んで下さい。

詩、短歌、俳句、隨筆、隨想、注文、こうしたこともお寄せ下さい。

締切は毎月十日前後ですが、締切前でも原稿が一杯の場合は次号に廻ります。

禁無断転載

宛先 小田原市城内

郷土文化館内 編集室

創刊号

昭和三十六年三月一日発行(毎月一日発行)

会費 一ケ年参百六十円

発行人 小田原史談会

機関紙発行委員会

代表 興水 正光

編集人 小田原市幸一丁目

発行所 小田原史談会

機関紙発行委員会

